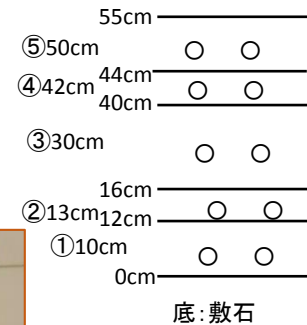
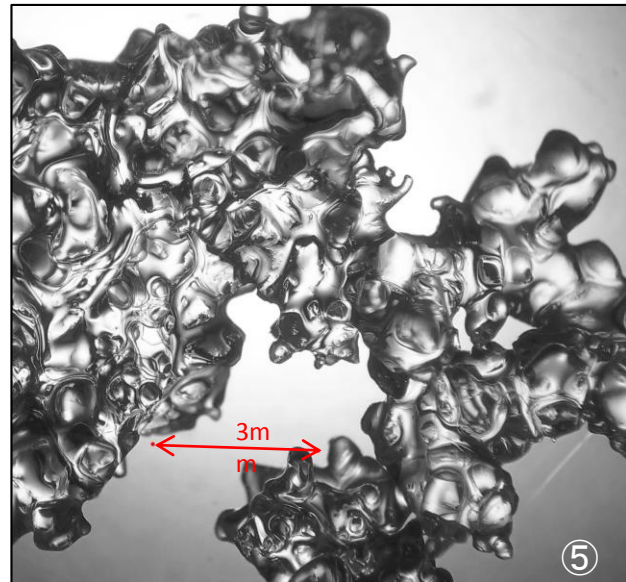
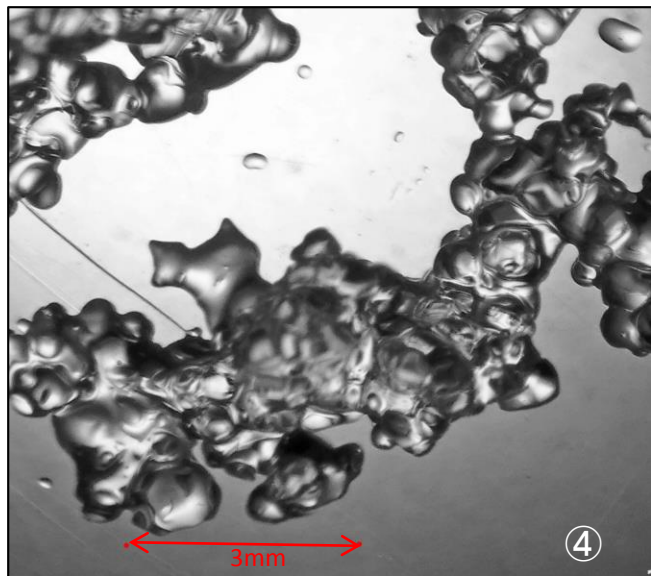
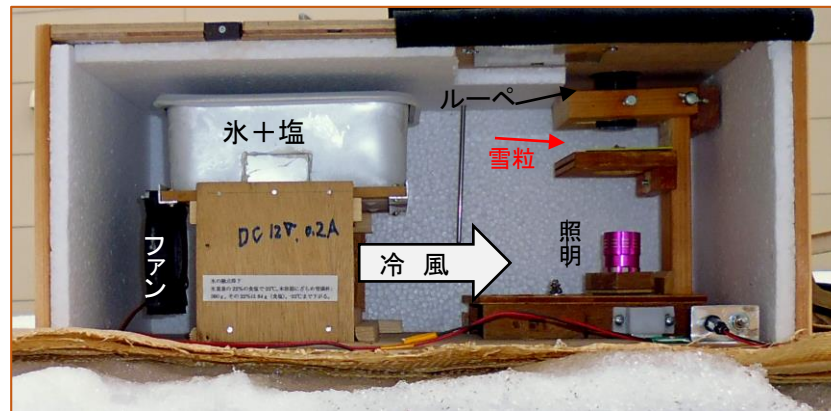


201/93/9:12:38 晴れ時々曇り、  
 気温+9.7°C。多分今冬一番の高温。  
 気温が高い時に粒を融かさずに撮影する  
 工夫。第37号ではDC12V,6Aの電流が必要  
 。今回の実験はより省エネ(12V, 0.2A)  
 (乾電池でも可)。  
 春先の気温がプラスになったときに現地で  
 撮影するため、この時期はざらめ雪が多く  
 、粒の熱容量が大きいので融けにくい。新  
 雪の小さな粒では多分不可。

最初なので、多くの不手際。  
 箱内温度がもっと下がってから開始した  
 ほうが良い。初めからカーテンと箱の間  
 に隙間がある。カーテンの両側から手を入  
 れての作業は要熟練。撮影の半分は  
 手振れだった。中腰の姿勢かも。  
 もっと練習が必要。



寒剤を用いた冷却装置：金属容器にざらめ雪+塩(22%)で-22°Cになる。容器の底に「ヒートシンク(放熱板)」を付け、ファンで送風する(12V,0.2A)。予備実験(蜜柑箱)で-6°Cまで下がった。実験例：装置内温度-0.5°Cで実感開始。撮影する粒をシートにのせ、カーテンの両側から手を入れて、箱内で粒の位置決め(ツマヨウジなどで)。上ののぞき窓から見ながら。粒をルーペの下にセットして、カーテンを閉じる、シャッターを切る。この作業を数回繰り返し、14分後に+2.1°Cまで箱内温度は上昇。



全層が濡れざらめ雪。  
 最下層は水浸み